

■ 前回は、東京電力とNTT、それぞれの電柱に名前が付いている、というお話でした。今回はその名前のうち、白子川の東大泉7丁目側の電柱に付いている「見返」という名前について探ってみます。

■ 「見返」これは「みかえり大泉寮」という、生活保護法に基づく施設があったことからつけられた名前です。この施設は、戦争で焼け出されたり、戦後中国などからの引き揚げなどのために、夫や父を失い、頼るところのない母子家庭を収容するためのもので、1950年7月から東大泉7丁目39、40番付近に開設されたものでした。雑誌『青少年問題』(1961年2月号財団法人青少年問題研究会)には「繁栄の深きはざまに—みかえり寮を訪ねて」というルポルタージュが載っています。その中に次のような記述がありました。

◆ 敷地 2072 坪のなかに、11 棟の宿舎。これは室数 70 室、503 畳。このほか 228 坪建坪約 55 坪のプランコ、スベリ台、鉄棒などの屋外施設を持つ保育園、及び現在は宿所に当てられている診療所 48.382

坪が、その内容。この数字から見るとかなり立派な施設といえる。事実、塙の外から眺めると炭鉱地帯の社宅コロニーのように見えることも確かである。が、一步内部に入ってみると余りのお粗末さに愕(おどろ)かぬわけにはいかない。

◆ 戦前、戦後の長い風雪に耐えて来た寮のなかに 1 室 7~8 世帯から 12~3 世帯の割りで母子世帯 565 人の人々がうごめいてる。

■ ここからは、かなり広い敷地にたくさんの施設があったこと、そして、かなりの方々が生活していたことがうかがえます。こんなみかえり大泉寮が、果たして東大泉のどのあたりにあったのだろうか、不思議に思われます。

■ そこで、敷地に隣接していたという「シャイニー・こいけ」の小池聡司さんをお訪ねし、当時のお話をうかがいました。



◆ 私は、終戦時 2 歳、1956 (昭和 31) 年に大泉小学校を卒業し、大泉中に進み、そのうちに二中ができたので、形の上では二中の第一期生です。みかえり寮はうちの畑の隣にあり、中に多い時で 800 人ほどが住んでいると聞きました。寮の中には同級生もおりました。その後、同級会に参加している人もいましたが、その人もまもなくして姿が見えなくなりました。当時住んでいた方と今、行き来はまったくくないですね。

◆ 白子川そばの、今の床屋さんのあたりには当時「プール」があって、よくカワセミが飛んで来ていましたよ。

◆ 寮がいつ頃なくなったのかははっきりとした記憶はありませんが、みかえり寮が来る前は別な施設があったのです。満州に花嫁を送り出すための施設です。もしこのことをお知りになりたかったら、詳しい方を紹介しますよ。

■ 小池さんに、広いみかえり寮がどのあたりにあったのか、地図に書いていただきました。(地図参照)

■ 現在の郵便局を含む、びっちらと家が立ち並ぶ地域に、かつては寮があったことがわかります。そして、以前から白子川の近くにあったプールにカワセミが来ていたというお話には、なるほどと納得。最近、ようやくカワセミの姿が見られるようになったと思っていましたが、それは「もどってきた」と表現する方が正しいようです。

■ また、小池さんがお話になったみかえり寮の以前にあった満州に花嫁を送り出す施設とは、どんなものだったのでしょか？

「満州」とは、現在の中国東北部に「大日本帝国」が建てた「傀儡の(かいらい)国家」のこと。私の叔父も「満蒙開拓青少年義勇軍」の一員として参加していったところ。さっそく、その方のお名前をうかがい、訪ねることにしました。

ここから先のお話は、また次号後編で。

(東谷 篤)